

名古屋大正期文芸雑誌考 (三)

木 下 信 三

田中仙丈と『胎動』

田中仙丈編輯兼発行人による大正八(一九一九)年三月創刊の『胎動』は、翌九年六月の第一一号まで発行して終刊した。第一号より第七号(大正八年九月発行)までは月刊誌として順調に発刊されているものの、第八号(大正八年十一月発行)は一か月遅れ、そして第一〇号(大正九年一月発行)はたった四ページである。同号後記には(困った事には第三種の認可が六十日で切れる事です、…其處で考へたのが此の窮策でさあ、まあ胎動と云ふ二字を通信省へ見せて、十円の質の利子を入れた形です)とある。第三種郵便の認可を継続させるための苦肉の策でもあったかのようだ。

また第一一号(大正九年六月発行)が大きく遅刊した理

由については同号に(同人は皆藝術家肌の人が多くて、やる時は可成どころか非常な熱を持ちますが、時間が経つとすぐ冷却して)云々と記されている。真実の理由はどのあたりであったのか、ともかくも『胎動』はこの号をもって終刊したのであった。

それはともあれ、大正期の名古屋地方で発刊された幾多の文芸誌のうちでも『胎動』こそは最も充実した内容の雑誌と考察されてよい。発行所は田中仙丈の住居・名古屋市中区南鍛冶屋町一丁目六番地に置かれた胎動發行所である。印刷所は名古屋市中区南大津町二丁目一三番地の不二印刷所。第二号以降、奥付には編輯兼発行人兼印刷人として田中仙丈の名が印刷されている。印刷所は第八号より第一〇号までが中区桶屋町四丁目一番地の龍陽社、第一一号が中区南久屋町三丁目の名古屋印刷株式会社である。雑誌

サイズは縦横 255mm × 182mm。一段組。

田中仙丈（幼名仙之助）は父北尾健之助（泥洲）、母ての三男として名古屋の大須に生れた。生年は不明であるが長兄の鎌之助（如洲）が明治一七（一八八四）年の生れ、仙丈との間に一男一女があるので、仙丈は明治二〇年代前半の出生かと推察される。田中家へ養子に入る。次に述べる長兄と同じく名古屋新聞社から大阪毎日新聞社に入り、編輯部副部長を最後に辞任。昭和二五（一九五〇）年に死去した。

長兄の鎌之助は名古屋新聞社から大阪毎日新聞社に移り、学芸課長を経てサンデー毎日、ホームライフの編集長、写真部長などを歴任、『日本山嶽巡禮』『山岳夜話』『近畿景觀』『聖蹟大和』『國立公園紀行』など数多の著書がある。名古屋時代に一種エポックメーカーキングともいべき文芸誌『印象』を発行している。四男の鏡之助は高野山高室院の執事、俳号如山を有する俳人でもある。松原家へ養子入りした五男の鐵次郎は『新青年』『新趣味』などに探偵小説を書いた本田緒生である。兄弟は父親北尾泥洲の血筋をひき文筆の才能に恵まれた人々であった。

仙丈がいつ名古屋から大阪に移ったかは知れないが、名古屋の地で文芸誌『胎動』を発行、同誌に幾編かの小説を発表したほか『名古屋新聞』に小説『花散る夕』『火のなだれ』『沼』を連載した。仙丈は『胎動』発刊の意気込みにつき

創刊号の「編輯後記」において次のように記している。

今迄眠つて居た名古屋に、此れ丈けの人が集つて是れ丈けの運動を起したと云ふ事は、名古屋の人の總てが喜んで呉れなければならない。喜ぶ許りでなしに眞底から賞めて貰はなければならぬ。無理矢理にでも私はそれを強ひたい、私等は今大いなる誇りに充ち満ちて居る、そして興奮し切つて居る、是れ程熱し切つて、あらゆる努力を以て造り上げられた「胎動」が決して同人雑誌の如き微温的な雑誌でない事を信ずる、其の中にははち切れさうな力がある事を信ずる、頁々に燃ゆるやうな熱のある事を信ずる、其れは今迄押へ壓へた欲求が「胎動」と成つて爆發したんだから、當然さうあらなければならぬ筈であるから。

たしかに『胎動』はこの仙丈の高唱を裏切ることのない充分に熱意のこもった質の高い文芸雑誌であった。内容は小説、評論、研究、随筆、戯曲、翻訳、詩、短歌などより構成されている。

『胎動』の内容

前引の田中仙丈「編輯後記」には（此れ丈けの人が集つ

て是れ丈けの運動を起したとあつたが、ではいかなる人々が『胎動』創刊号に集つたのか、その顔ぶれを含め、全号の主要目次ならびに発行年月日などを記す。

第一号 大正8年3月10日発行 36頁 40銭

小林橋川「眞純に飢う」評論、伊藤只聽「夕風」短歌一八首、中島花楠「鶉の聲」短歌一八首、柴田楊花「籠の鶯」短歌一八首、桑原白灯「餘寒小情」短歌一七首、榊原春村「裸木」短歌八首、柄澤廣之「冬日雜詠」八首、小林富「鏝の音」短歌一八首、田中仙丈「境界」小説、野崎白塔「抜穴から」小説、藤浪水處「譯詩二篇」訳詩、鷺野飛燕「父母」短歌一八首、長司春湖「紅梅」短歌一八首、宮瀬渚花「鳥羽小景」一八首、鷺野和歌子「春の深雪」短歌一八首、青木穠子「遅日」一八首、飯田よしね「盃を碎く」小説、三田滯人「吾子と小兎」短歌八首、尾崎楓水「美女の脱胎」研究、仙・猪・花・春・草・藤・水・光・鶴・釦「第一線」雑記、仙「編輯後記」、「表紙畫及挿繪解説」、エー・ブロック「冤死」表紙絵、アロンヂエ「森の景」挿絵、太田雅光「フームレスク」版画挿絵、広告

第二号 大正8年4月1日発行 38頁 40銭

チエホフ・草野柴二訳「猫の出産」小説、小林橋川「斷片的の人生」評論、田中仙丈「心と心」隨筆、柄澤廣之「夢

を追う」小品、青木穠子「銀の壺」短歌一八首、桑原白灯「父病めり」短歌一八首、宮瀬渚花「淺春抄」短歌八首、小林富「街頭小情」短歌八首、ボードレール・藤浪水處訳「惡の華より」訳詩、藤田準「北へ」小説、野崎白塔「抜穴から」小説、石田荳青「二度目の春」小説、三田滯人「旅愁」短歌八首、長司春湖「青菜畑」短歌八首、柴田楊花「倦怠」八首、鶴賀比佐彌「南信雜詠」短歌八首、榊原春村「溪間」短歌八首、鷺野飛燕「浴後の味淋」短歌八首、伊藤只聽「龍笛」一八首、中島花楠「都に歸る」短歌一八首、尾崎楓水「久遠の處女性」研究、猪・楓・鶴・芦・宮・滯・花・雪・仙「第一線」雑記、楓「編輯後記」、「表紙畫及挿繪解説」、ボツチエリ「美人肖像」表紙絵、アルバート・ムーア「春の遊」挿絵、太田雅光「曙光を視つめて」木版挿絵、広告

第三号 大正8年5月1日発行 36頁 40銭

野崎白塔「放浪者の群」評論、石田荳青「惜春の賦」隨筆、田中仙丈「私の一生」隨筆、鷺野飛燕「芹を摘む」短歌一八首、中島花楠「富田濱」短歌一八首、小林富「草のほひ」短歌八首、柴田楊花「春の雷」短歌八首、伊藤只聽「管絃」短歌一八首、宮瀬渚花「菜種の花」短歌八首、榊原春村「若葉・杯」八首、青木穠子「桐の花」短歌八首、桑原白灯「をさな妻」短歌八首、「五調」短歌

―たかね・鈴木如空・加藤清子・山田八重子・服部布美子、長司春湖「四月盡」短歌一八首、ふゆのひとは「一人舞臺」戯曲、田中仙丈「それからそれへ」小説、藤田綱「曇天の出来事」小説、嘯濤生「回避」小品、藤浪水處「譯詩二篇」訳詩、フォガッツァロ・草野柴二訳「青春譜」小説、仙・花「第一線」雑誌、花楠「編輯後記」、尾崎生「挿繪解説」、ボチチエリ「美人肖像」表紙絵、ゴツホ「噴水」挿絵、広告

第四号（詩歌号） 大正8年6月1日発行 34頁 40銭

尾崎楓水「原始歌謠と其背景」評論、田中仙丈「追憶小品」詩、鶴賀比佐彌「少年禮讚」詩、藤浪水處「丘にて他三篇」訳詩、小林橘川「茶の國」隨筆、壽之助「生きて居る事の騒々しさ」詩、野崎白塔「舊くして新しき調」評論、柴田楊花「晝鳴く蛙」短歌一八首、桑原白灯「徂春」短歌二九首、青木穠子「霸旅雜詠」短歌一八首、長司春湖「海邊より」短歌一八首、榊原春村「蠶を飼ふ」短歌一八首、小林富「眼を病みて」短歌一八首、伊藤只聽「源氏香」短歌一八首、鷺野飛燕「茄子と胡瓜」短歌一八首、竹田寅三「丹躑躅」短歌一八首、宮瀬渚花「溪の雨」短歌一八首、中島花楠「事務室の雨」短歌三七首、三田瀧人「峰岸幸作を悼む」短歌一七首、尾・鶴・寺・準・白・芦・楊・仙「第一線」雑誌、三「編輯後記」、尾崎生「表

紙繪及挿繪解説」、アンリ・ルソー「堡砦」表紙絵、エル・グレコ「聖マウリチウス」挿絵、広告

第五号 大正8年7月1日発行 36頁 40銭

田中仙丈「反抗」小説、柄澤廣之「鏡の威嚇」小説、中島花楠「青葉の家」短歌一八首、長司春湖「あぢさゐの花」短歌一八首、宮瀬渚一「雜感」隨筆、野崎白塔「レオナルド・ダ・ヴィンチ論」評論、藤田準「ちまき」小説、滋賀信「心」詩、藤浪水處「譯詩二篇」訳詩、フォガッツァロ・草野柴二訳「青春譜」小説、柴田楊花「さみだれ」短歌八首、榊原春村「枇杷と吾子」短歌八首、封醉小史「初客」小説、花・廣・仙・準・鶴「第一線」雑誌、鶴「編輯後記」、尾崎「挿繪に就て」、アンリ・ルソー「堡砦」表紙絵、ストラッドウイック「金のひゞき」挿絵、廣重「東都名所高輪月夜」挿絵、広告

第六号 大正8年8月1日発行 34頁 40銭

尾崎楓水「染著と離脱」隨筆、青木穠子「桐の木蔭」小説、榊原春村「鳥羽の海」短歌八首、長司春湖「山陰行」短歌八首、鶴賀比佐彌「雪を背景に」短歌八首、柴田楊花「蚯蚓鳴く」短歌八首、藤浪水處「譯詩二篇」訳詩、ふゆのひとは「舞臺裏」小説、田中仙丈「時の流れ」小説、楊・比・楓・鶴「第一線」雑誌、「編輯後記」、尾崎「挿繪

に就て」、歌川國芳「異人國圖」表紙絵、アルバート・ムーア「遠雷」挿絵、広告

第七号 大正8年9月1日発行 36頁 40銭

中島花楠「山路」短歌三七首、飯田美稻「胎動試演會」記事、岡戸武平「佐藤の死」小説、林葉之介「或る二人の男」小説、青木稷子「桐の木蔭」小説、藤浪水處「近代詩二篇」訳詩、中島花楠「緑の心」隨筆、加木昇「鼻と口」小説、柴田楊花「短歌三首、飯田美稻「或夜の對話」短編、尾崎楓水「あぶなぶり考」研究、桑原白灯「鮎と胡瓜と仔猫」短歌一五首、小林富「伊勢路」短歌一八首、小林富「孤野行」一八首、猪牙夫・花「第一線」雜記、「編輯後記」、「口繪解説」、ダ・ヴィキンチ「婦人像」表紙絵、広告

第八号 大正8年11月1日発行 36頁 40銭

草野柴二「蹂躪られた人々」小説、田中仙丈「或男の一日」小説、三田滯人「百日咳」短歌一六首、榊原春村「富士と揖斐川」短歌一八首、長司春湖「續山陰行」短歌一八首、青木稷子「耶馬溪」短歌一八首、青木稷子「花櫻島」短歌一八首、青木稷子「伊豆の山」短歌一八首、中島花楠「暴風雨あと」短歌八首、柴田楊花「秋の入陽」短歌八首、野崎白塔「我が奏づる喇叭」詩、藤浪水處「近代

詩集より」訳詩、尾崎楓水「浮世繪研究(一)」研究、後藤正義「歌三首」短歌、廣之・仙・武平生・水尾生・棚・花「第一線」雜記、仙「編輯後記」、「挿繪に就て」、「社友の規約」、ダ・ヴィキンチ「婦人像」表紙絵、ミレー「農夫の焚火」挿絵、広告

第九号 大正8年12月1日発行 34頁 20銭

野崎白塔「默禱」手記、飯田美稻「三つの對話」小説、岡戸武平「王様の悲しみ」小説、三田滯人「名古屋歌壇の人々(一)」評論、田中仙丈「蕙の下の雜草」詩、藤浪水處「近代詩三篇」訳詩、沼波楚々「夕暮の蒼白い星」詩、中島花楠「山茶花」短歌一六首、小林富「秋より冬へ」短歌一八首、柴田楊花「水の光」短歌一〇首、後藤幽香「歌五首」短歌、淡路千之助「仕合者 不仕合者」感想、田中仙丈「妻」感想、尾崎楓水「藍染帯名残夕霞」戯曲、よしね・鶴・水尾・義・廣之・芦青・花「第一線」雜記、花楠生「編輯後記」、武平「本號の版畫に就て」、尾崎「ミスセに就て」解説、「社友の規約」、広告

第一〇号 大正9年1月28日発行 4頁 10銭

三田滯人「生きて居る」感想、岡戸武平「童謡三ツ」童謡、飯田美稻「或男に云へる」小品、中島花楠「雪解の頃」短歌九首、よしね「編輯後記」、「社友の規約」

第一一号 大正9年6月1日発行 72頁 40銭

草野柴二「ヘツダの最後」戯曲翻訳、田中仙丈「蘇生せず」隨筆、柄澤廣之「臆病者」小説、飯田美稻「タンホイゼルの悩み」戯曲、辰見鈴夫「悪友を讀むる歌」詩、藤浪水處「平和」ハイネ詩訳、中島花楠「溪谷晚春」短歌一七首、石田忠三「破獄者」小説、尾崎楓水「偶然ではない」戯曲、三田滯人「名古屋歌壇の人々(一)」評論、岡戸武平「道程」小説、よしね「とある日に」隨筆、青木稜子「顧みられて(一)」小説、桑原白灯「異國の煙草」短歌一五首、柴田楊花「早春」短歌一七首、井手蕉雨「擬曲 恙浪幕報黃表紙」戯曲、みの字「夜のなぐさみ」詩、水尾はじめ「夕べの別れ」詩、猪「編輯後記」、「消息」、「社友の規約」、ヂユウラー「女の肖像」表紙絵、ヂユウラー「手」挿絵、ヂユウラー「聖クリスト」裏絵、

『胎動』の人々

『胎動』に掲載された主な小説は、田中仙丈の「境界」「反抗」「時の流れ」「或男の一日」をはじめ、柄澤廣之の「臆病者」、岡戸武平の「佐藤の死」「王様の悲しみ」「道程」、尾崎楓水の「初客」、石田若青の「二度目の春」、そして青木稜子「桐の木蔭」「顧みられて」などがあり、評論では小林橋川の「眞純に飢う」「断片的の人生」、戯曲では井手

蕉雨の「擬曲 恙浪幕報黃表紙」、尾崎楓水の「藍染帯名残夕霞」、「偶然ではない」がある。

歌人としては伊藤只聽、鷺野飛燕、鷺野和歌子、中島花楠、長司春湖、宮瀬渚花、青木稜子、桑原白灯、三田滯人、榊原春村、柴田楊花、小林富らが活躍した。浮世絵に関する精密な研究、小説、戯曲、隨筆、短歌など多才の文筆を揮った尾崎楓水は、楓水の号を含め、鶴賀比佐彌、ふゆのひとは、封醉小史とすべて尾崎久彌の筆名である。尾崎久彌の幾篇かの評論研究は、後年、江戸後期文学研究者、浮世絵研究家として大成するその基礎をなす作品であった。もうひとり、同誌に幾多の西欧詩を紹介した藤浪水處はユニークな詩人で、大正から昭和期にかけて、廣小路伯爵の異名で名を知られた。

柄澤廣之は仙丈と同じく名古屋新聞記者で、『名古屋新聞』に「灰色の假面」「冷笑」を連載した。岡戸武平も、当時は名古屋新聞社に勤務したが、結核のため新聞社を退きやがて小酒井不木の助手をつとめた。不木死後は不木全集編集にたずさわり、博文館勤務を経て作家生活に入った。飯田美稻は名古屋新聞社社会部長を経て、後年、松坂屋常務、榮印刷社長になった。井手蕉雨は日露戦争の従軍記者体験に取材した小説「血薔薇」が『文藝俱樂部』に一等入選、以後文筆生活に入り、戯曲家として名をなした。

小林橋川は田中仙丈の上司。明治一五(一八八二)年に

滋賀県に生まれ、近江新報社から名古屋新聞社に入社。主筆、編集局長、副社長を経て中部日本新聞社の取締役論説委員になり、戦後、名古屋市長となった。『橋川文集』『落日の莊嚴』など著書も多い。次は、『胎動』の編輯発行人である田中仙丈の短篇「或男の一日」の冒頭の一節である。

兼吉はN市の或る新聞社の社會部記者であつた。變り勝ちな新聞記者の生活は、兼吉を何時と云ふ事なしに古顔にして行つて、まだまる三年にも成らない裡に、其社の社會部長の直接下に働く、社會部面の編輯をやらされるやうに成つた。それ以來彼の収入は、折柄の勞働問題や同盟罷業の影響を受けて、めき／＼と好く成つて行つた。月の終ひに近い頃、新聞紙に包まれた纏つた紙幣の三四枚と、前借を差引いた計算書とを受取ると、兼吉は何時も、入社の當時十二圓を貰つて働いて居た其當時の生活が顧られて、妙な皮肉が彼の身体全体に漲るのであつた。

恰度その日は、彼の休日に當つて居たので、久し振りに公園へでも遊びに行かうと、晝食を兼ねた朝飯を十一時過ぎに喰べて、ぶらりと家を外にした。初秋の澄み切つた空氣が、稍々濕りを帯びた薄暗い地上から、屋並の軒の小隅に迄も、一杯に充滿して居て、紺碧に晴れた大空の下は、涙脆いその中から、歡喜と生氣とがはち切れ

さうであつた。

作者の生活体験を叙した心境小説ともいふべき作品。大正期にもっとも盛んであつた私小説のひとつと見做してよいもので、狭い世界に閉じこめられた小市民知識人の文學として支配的となつた當時の小説形態に属する作品といつてよからうか。

ところで、『胎動』の発刊された大正八（一九一九）年は、大正三（一九一四）年に勃發した第一次世界大戦が終結した年であつた。日英同盟を締結していた日本はイギリス支援を名目に中国青島に派兵し大陸での權益の獲得に奔走した。そして、戦禍をうけることなくして好景氣を享受し諸産業の生産と輸出業績を飛躍的に進展させた。また、大戦のもたらした、いわゆる大正デモクラシー運動は進歩的な青年知識層の心をとらえ新秩序の構築を志向した。しかし、また一方では前年の米騒動につづいて勞働争議、小作争議が頻發した年でもあつた。

明治期から大正期にかけて、文學的には自然主義文學運動が下火になり、反自然主義の文學や耽美派が台頭し、明治四三（一九一〇）年には裕福な知識青年によつて『白樺』が創刊され、その翌年には既成の道德にしばられた女性の自我の解放と復権を宣言した『青鞥』が創刊された。さらに大正期に入ると白樺派の觀念的な理想主義に対する疑問

から、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、山本有三らを中心とする新現実主義の作家たちが登場してきた。

『胎動』創刊号の巻頭に掲げられた小林橘川の評論「眞純に飢う」は、こうした政治的社会的情勢や文学的運動の流れのなかで執筆され、いわば『胎動』の方向性を示唆する面があるようにも看取されるので、その冒頭部分を引用してみる。

世界は永い悩みから全く解放された。黎明の光りが深く鎖された人間の頑なる心の窓を、ほがらに射しこめてゐる。

久しい間、自己の小さい、清い、しかしながら狭い世界に住むで来た人間に、もつと廣い、もつと大きな愛を囁きそめた。白い眼と眼を向けあつたり、白い歯と歯を見せ合つたりした敵人同志が、博大なる人類的な平等観の下に、いつとなしに手を握り合ふような光景が明けそめて来た、文藝の中心核子を爲して来たイゴーが、いぢけた心から、晴やかな心に移つて行つた、人道的な、肯定的な作物が、若き人々によりてそこにも、こゝにも、發表された。自然主義時代の息詰るような、息苦しい壓迫から人々は多少緩和された。享樂主義のかりそめなる強い色調に酔ひ爛れたのも暫くのことであつた、そして凡ての人々は足早に人道主義的な愛の叫びに突進するよ

うになつた。それは文藝の傾向がさうだと云ふのではない、一般人文の思潮は今そこに向ひつゝ、あるといふのだ、かの恐ろしい戦争ですら、その戦争を結末づける講和會議ですら。人道的な、人間的な、博大な愛の觀念につよく著しく塗り込められるような世界となつた。世界は新しく生れ變らむとしてゐる、人間は新しく生れ出でむとしてゐる、世界再造の時、吾等は今微かながらに新しきもの、『胎動』を感じる。

上記目次にみるごとく『胎動』では多くの歌人たちが活躍した。同誌における短歌の位置はけつして小さなものではない。そこで次に同誌掲載のうち幾人かの作品を一首づつ列記してみたい。作者名の下の数字は掲載号数を示す。

別れ来て見る目まぶしき梅の花朝のうなじにひやひやと

散る 伊藤只聽 1

下萌ゆる二月の山の岩かげに胡麻のむすびをはみにける

かも 中島花楠 1

日のひかり春めきたれば一すじの道もなつかし野に出づ

る道 柳原春村 1

美しと見る間ほどなく照らす陽に雪消の音のしきりなる

かも 鷺野和歌子 1

さ夜深く起きて遊べる子を守りてせん方もなき煙草をす

ふも

三田滯人 1

われ病めば銀の瓶子も手にとらでぼつねんとして君おは
します

青木穠子 2

今日もまた慣れし仕事をなれしまま始むることかペン執
りにけり

柴田楊花 2

開けさして炬燵にいれば眞さをなる空をかざりて雲吐け
る見ゆ

鶴賀比佐彌 2

はなたれしけもの如くしみじみと草のほひを嗅ぎに
けるかも

小林 富 3

四月越し歸るうれしさしみじみと窓外の菜の花をわが見
る

宮瀬渚花 3

逢へばまた別れがつらしまた逢はむ逢はむささきの日おも
ひいづるも

長司春湖 3

別れたる妻をひそかに思ひつ、机の塵を拂ひけるかも

桑原白灯 4

鋤かへす土のほひも心地よく茄子植うる日の晴れてあ
りけり

鷺野飛燕 4

明治四一（一九〇八）年三月、熱田で創刊された短歌誌『八
少女』は地方の同人誌とはいえ若山牧水、尾上柴舟、太田
水穂、折口信夫、金子薫園、北原白秋、窪田空穂、佐佐木
信綱、土岐哀果、富田碎花、水野葉舟、矢澤孝子、吉井勇
らも寄稿しており現在高く評価されている雑誌である。牧

水の歌集『獨り歌へる』も八少女會から発行された。

『胎動』の歌人のうち、鷺野飛燕、鷺野和歌子（花岡紅
稻女）、鶴賀比佐彌（尾崎楓水）は『八少女』の同人であり、
長司春湖（本美鐵三）、榊原春村も同誌に作品を発表して
いる。鷺野飛燕（芳雄）は鷺野和歌子の夫で名古屋の専売
公社に勤務したらしい。長司春湖は明治二一（一八八九）
年に知多郡大野町に生まれ、のち本美家に入った。明治
四〇年代、文芸誌『明笛』『SEA SIDE』『尾三文學』を、
また大正期に入つては『第一步』を發行。昭和五（一九三〇）
年には『明治大正歌書解題』を上梓した。

柴田楊花は明治二九（一八九六）年の生まれ。『胎動』
に先立つ大正五（一九一六）年、歌誌『ナゴヤ』に係わ
り同誌編集發行所を自宅に置いた。病弱にして昭和五
（一九三〇）年に逝去した。遺歌集『楊花集』がある。青
木穠子は明治一七（一八八四）年、名古屋に出生、大正九
（一九二〇）年にこのはな會を創立。戦後、歌誌『明鏡』
を創刊、歌集に『木靈』『持統天皇』がある。三田滯人（柴
田儀雄）は名古屋新聞社編集局長、中日新聞社南方総局長、
中日新聞社監査役を歴任。大正一二年（一九二三）中部短
歌會を設立、淺野保、棚橋古刀雄らと歌誌『短歌』を發行
した。戦後は『曆象』を主宰し、中日歌人會を創立した。
ところで、明治の末期、田中仙丈の長兄北尾鎌之助が発
行した『印象』は単に文芸雑誌としてのみならず、美術に

対する関心が深く、誌上に美術評論や絵画に関するエッセイなどを執筆する一方、誌上にドガ、ロダン、ドニなど多くヨーロッパの絵画を紹介した。『胎動』もそれに倣ったのかどうか、美術評論のほかに表紙絵や挿絵としてサンドロ・ボッチェリ、アルバート・ムーア、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ、アンリ・ルソー、エル・グレコ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミレー、ミケランジェロ、デューラーなど多くの西欧絵画を紹介している。

そして『印象』が戯曲、演劇評論、劇評などにも少なからざるスペースをさいたごとく、『胎動』もまた戯曲の掲載のみならず『胎動』メンバーによる上演を試みている。第七号収載の飯田美稲「胎動試演會」には、井手蕉雨「手袋」、岡本綺堂「佐々木高綱」、中村吉蔵「飯」、翻訳劇「ベニスの商人」それぞれの配役が発表されている。たとえば、「ベニスの商人」では、ベニスの公爵に中島花桶、グレシヤノ・飯田美稲、ポーシヤ・田中仙丈、シヤイロツク・太田雅光といった具合である。太田雅光は『胎動』の挿絵やカクトを担当、やはり名古屋新聞社に勤務していた。童話作家としての活躍も瞠目される。

以上に見るごとく、編輯発行人の田中仙丈をはじめ、柄澤廣之、飯田美稲、小林橘川、草野柴二、三田滯人、太田雅光ら『胎動』のメンバーには名古屋新聞社勤務の者が多く見られ、名古屋新聞勢を中心に発行された文芸雑誌と見

做してもさしたる間違いはないようである。

(きのしたしんぞう)